

「時をおよぐジラ」

むかしむかしのそのまたむかし、人間がこのちきゅう上にあらわれる前のお話です。そのころは、このちきゅうはしぜんゆたかで、どうぶつたちや魚たちの樂園でした。

クジラのショウちゃんは、ゆたかな海で生まれ、大すきなお父さん、お母さん、友だち、そして、多くのなかまとともに、楽しくくらしていました。

ショウちゃんは、このしぜんゆたかな海が大好きで、いつもおさん歩に出かけていました。数千びきの小魚のむれ、見たことのないようなふしぎな形をした生きもの、とってもきれいでうっとりするような魚たち、海の中でゆらめく数え切れないほどの海草、そのたくさんさんの生きものとの出会いが、ショウちゃんにとって何よりのよろこびでした。

海のさん歩からもどったショウちゃんは、お友だちのノブちゃんと出会いました。

「ショウちゃん、また海のおさん歩に行っていたの。」

「うん、だってぼく、いろいろなお魚さんたちにあったり、お話ししたりするのが楽しいんだもん。」

「本当にショウちゃんは、この海が大好きなのね。」

「ノブちゃんもいつしよに行こうよ。本当にたくさんさんの生きものが、この海にはいるんだよ。」

「うん、行こうか。じつは、わたしも、この海が大好きなんだ。」

二人とも、この海に生まれてきたことをしあわせに思っていました。



ところが、このしぜんゆたかな海に大へんなことがおつたのです。だんだんと海の水が引きはじめ、海草はひ上がり、多くの魚がいきたえていったのです。

「ぼくの大すきだった海が……。いのちいっぱい海が……。」

だけどショウちゃんにはどうすることもできませんでした。一つ一つきえていくいのちを見まもることしかできなかったのです。そして、とうとうお友だちのノブちゃんも、お母さんもお父さんもみんないなくなってしまう、ショウちゃんも、水がなくなった海の中で、一人ぼっちで、よこたわってしまいました。

「このまま……この海も、しのせかいになっちゃうのかな……。」

「いやだ。そんなこと……、そんなせかいなんて……。」

ショウちゃんの目から、なみだが一つぶこぼれおち、一つぶのたねの上におちました。そして、そのたねから出てきた小さなめを見ながら、とうとうショウちゃんも力つきていきました。





それから、長い長い時がすぎていきました。シヨウちゃんはか石となって、岩の中でねむりつづけました。

どれぐらいの時がたつたのでしょうか。ねむりつづけるシヨウちゃんに、小さなもの音が聞こえてきました。

「チュン」「チュンチュンチュン」「ピ・ピ・ピ・ピ」「サヤサヤサヤ・・・」

「ん……。何の音だろう。」

シヨウちゃんが目をあけると、そこには、一人の男の子が立っていました。

「クジラくん見いーつけた。」

シヨウちゃんは、か石をほりに来た一人の男の子にはつ見されたのです。



そして、長いねむりからさめたシヨウちゃんの目の前には、思いもかけなかった光けいが広がっていました。そこは、たくさん生きものにかこまれた緑ゆたかな森だったのです。長い年月がたつて、海の生きものたちが土にかえり、そしてえいようとなり、新しいのちに生まれかわったのです。ひ上がった海に草がはえ木がしげり、そして、たくさんの虫や鳥、どうぶつたちが生き生きとこの森をかけ回るようになったのです。

「あのしんだ海が、こんなゆたかな森に……」

「草がはえている。木がしげっている。鳥がとんでいる。どうぶつたちがかけ回っている。歌声が聞こえる。わらい声が聞こえる。みんな生きている。みんな生きているんだ。」

「ノブちゃん、お母さん、お父さん、見てーらん。ぼくたちの海が、こんなみどりゆたかで、どうぶついっぱい森に生まれかわったんだよ。」



シヨウちゃんは、とつてもとつてもうれしくなつて、今この森をかけ回っているどうぶつや草や木たちに、そしてむかしの海のなかまたちにとどくように、大きな声でよびかけました。

「ありがとう、みんな。」

そして、あたたかい目で、いつまでもこの森を見つづけていました。

【参考文献】

古川義雄・山岡隆信著（2002年（平成十四年））「備北層群」 庄原化石集談会
庄原市自然科学博物館（2008年）「第61回特別展『備北層群産出のクジラ類化石』展示解説」

絶版